

二つの世界

加来雄之

KAKU Takeshi

人 の世界と神仏の世界、生者の世界と死者の世界、現実世界と理想郷など、質を異にする二つの世界を語る思想は少なくない。私たちがこの現実世界で行き詰まるとき、もう一つの異質な世界、もしくは見えない世界への語りをみずから世界理解の内にもつことは、この世界の意味や生き方を照らし返し、今までとは異なった視座から現実を受けとめる可能性を開いてくれる。

ただ二つの世界を受容するときに注意すべき点は、その二つの世界がどのように表現されているかである。たとえば「神仏の世界」といっても、その世界が、人間の欲望を満たすものであったり、この世界や個人を単に否定するものであったり、人を支配するものであるならば、それは危険である。だからこそ二つの世界を語るとき、それぞれの内容とそれらの関係と二つの世界による生き方とがはっきりと示されている必要がある。

私が帰している浄土仏教は、二つの世界を衆生の世界（穢土）と阿弥陀仏の世界（淨土）として説いている。浄土仏教の伝統の中

には、淨土を死後に生まれる他世界として語るものもあり、淨土を求めるべき理想の彼岸として語るものもある。そのような淨土の語りが、困難な現実を受け容れられない苦悩、死後に対する不安、生きがいが見出せない虚無などの人々の切実な課題に応えてきたことは確かである。

しかし親鸞は、師・法然の教えを通して、如来が衆生を攝取して捨てないはたらきこそ他力の淨土の本質であると受けとめ、その淨土を世親の『淨土論』の「願心莊嚴」の教えを通して、如来の願心によって実現する世界として顕らかにした。「如來」の定義もさまざまであるが、親鸞は『大無量壽經』によって「從如來生（如より來生して）」という真理から生まれてくる見えない利他のはたらきをしている。智慧によって穢土の実相を見きわめ、大悲によって穢土を包摂し、そして穢土を凡夫が自己と共同体との真実を求める場へと転じる、その如來の見えない願いのダイナミックな働きの相以外に淨土はない。

また親鸞は仏説を通して、如來を見失わせるような、淨土に似て非なる世界の語りがあることも、また淨土の語りを人間の関心に取り込み神秘的体験や道徳的理想的へと変質してしまう危険性があることも認識していた。

親鸞は、二つの世界の成り立ちを「よくよく案じ」ことで、「本願のかたじけなさよ」と表明する「一人」として、二つの世界の交差に生きることができた（『歎異抄』）。

親鸞が生涯をかけて、穢土と淨土という二つの世界の真相に深く迫り、それぞれの内実と関係と利益とをどこまでも正確に厳密に表現し記述することに努めた理由がここにある。私は、この親鸞の営みを手がかりとして、私自身における二つの世界の意味を確かめていきたいと思う。

(かく たけし・親鸞仏教センター主任研究員) 近年の論文に、「真宗の罪業觀——願生と攝護」(真宗大谷派保護司会『真宗と更生保護——教えから問われた姿勢』、2022年)、"Being-within-the-Tathagata in Yasuda Rijin's Thought: Toward Laying a Foundation for the Religious Subject", Mark L. Blum and Michael Conway, eds., *Kiyozawa Manshi's Seishinshugi in Modern Japanese Buddhist Thought*. University of Hawai'i Press, 2022など。